

政治研究結果報告書

— 政治研究助成 —

西暦 2023年 4月 7日

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 明治大学政治経済学部 専任講師
碓 陽子

第 39 回（2020 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

政治化する性的マイノリティとしての「ファット」
Politicized “fat” as sexual minorities.

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

In the US, the obesity epidemic has led to a growing social movement, the Fat Acceptance Movement, which opposes discrimination against obesity since 1969. For a long time, participants in this movement were predominantly white heterosexual women. In recent years, however, an increasing number of women who self-identify as sexual minorities, such as queer fat and lesbian fat, who had previously been excluded from the movement.

Focusing on Judy Freespirit, a fat activist who was active from the 1970s to 2013, this study clarifies what 'queer life' means for 'fat' through her artistic activities, writings, art works, and political claims. Through this work, the heterosexist-centred norms of obesity-hatred discourses are questioned.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

アメリカでは、肥満の流行を背景として、肥満差別に反対するファット・アクセプタンス運動という社会運動が活発になっている。申請者は、この運動について長期的な人類学的な調査を行ってきた。この運動の参加者には白人異性愛の女性が多く、そうではない、例えば、レ

ズビアン¹の太った女性や障害を持つ太った人たちは運動から排除されてきた。ところが、近年、クィア・ファットやレズビアン・ファットといった性的マイノリティを自称する女性が増えてきた。本研究では、アメリカ合衆国を中心に、性的マイノリティを自称する人々による芸術活動や作品、雑誌の表象、政治的主張等を通して、かれらがどのように性的マイノリティとして活動するのか、「ファット」における「クィアな生」とはいかなるものかについて明らかにしたいと考える。この作業を通じて、肥満嫌悪の言説における異性愛中心主義的な規範そのものを問い直すことができるだろう。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

申請者は、2022 年 8 月にアメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコの GLBT Historical Society に所蔵されているファット・アクセプタンス運動に関する資料の調査を行った。なかでも 1970 年代からファット・アクティビストとして活躍したジュディ・フリースピリット (Judy Freespirit) について、彼女がどのような活動をしてきたのかについて、残された手記や資料などから調べている。なぜ彼女に注目したかという点、ラディカル・フェミニストであった彼女こそが、当時のファット・アクセプタンス運動をフェミニズムや障がい者運動の文脈に引き寄せて、新たな展開を先導してきたからだ (ラディカル・フェミニズムとは、第二波フェミニズム運動で「個人的なことは政治的である」と問題提起し、女性の身体が不平等に抑圧されていることを問題視したフェミニズムの一派である)。

フリースピリットは、1936 年にミシガン州デトロイトの労働者階級のユダヤ教の家庭に生まれた。幼い時に父親から性的虐待を受け、また母親からは 5 歳の時からダイエットをさせられていたようだ。大学を出て、結婚して、息子ジョーを産んだ後の 70 年代前半に女性解放運動に出会い、夫と離婚している。フリースピリットは、太った女性に対する社会からの偏見や差別に対し抗議するために、仲間と 1972 年にロサンゼルスで「ファット・アンダーグラウンド」という組織を立ち上げた。また「ファット・リップ・リーダーズ」や「ファット・チャンス」というダンス集団を設立し、自身もパフォーマンスを行った。その時期にレズビアンであることをカミングアウトしている。晩年は、ユダヤ人コミュニティにおけるレズビアン²の運動にも関わっている。喘息を患い身体が不自由になっていくと、今度は障がい者運動にも関わるようになり、太った人の権利を障害法との関係の中で考えようとした。このように、70 年代から 2013 年に亡くなるまで、彼女は多くの運動に関わっていたことがわかった。

彼女のアーカイブ資料の中には、詩、エッセイ、論文、演劇の脚本などが残されており、現在それらの資料を整理中である。わかっていることは、彼女はファット・アクティビストとしての活動が注目されやすいが、他にも、レズビアン、障害、DV サバイバー、ユダヤ教徒など

複数の「非規範的」な要素を抱えて生きてきた人であったということだ。そのため、彼女の逸脱と差別の経験を簡単に言い表すことは難しい。複数の要素が重なり合った特有の差別や抑圧を経験しながら生きていたはずだからだ。

クィア理論のハルバースタムやエデルマンに従えば、非規範的な身体で生きることは、再生産や将来の健康といった未来主義的で規範的な異性愛中心主義的時間から逸脱した「クィアナ生」に相当する。特に、肥満が公衆衛生や医療の領域でも問題化されている状況で、「ファット」でい続けることは、反社会性や再生産的未来主義の否定性を受け入れている、という読み方も可能なのかもしれない。しかしながら、彼女の政治活動から読み取れるのは、むしろ、それらの「否定性」や「反社会性」、「非規範的」な身体が、未来の変革に向けた創造力の源泉になっていたのは間違いない。社会規範に押しつぶされることなく、ダンス、演劇、執筆、アートなどのさまざまな表現方法で自分の生きる道を、仲間とともに探してきた人であった。今後も引き続きこれらの資料をクィア理論の文脈で解釈し、整理分析していきたい。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

論文:2021年「「肥満の流行」とメタファーとしての「進化」」『現代思想』vol.49(12): 81-89.

発表:2023年4月8日「当事者とは誰のことか:アメリカのファット・アクセプトランス運動から考える」「社会的スティグマのない社会をめざして(市民公開シンポジウム)」(zoom)

エッセイ:2023(刊行予定)「アメリカのファット・アクティビズムからみる「肥満問題」と身体の多様性(仮)」『季刊民族学』

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。